

「イエスの洗礼から教えられること」

マルコ1：9-11

平吹光太 21・08・29

私たちの心には日々、どんな声があるか。神様を信じた後でも、罪ばかりを犯してしまうこんな自分に価値があるのか。自分は生きている意味があるのか。生きていて良いのかと思ったことはないか。今日の聖書箇所は、約 30 年間故郷のナザレで生活をしていたイエス様が、公の生涯の前にバプテスマのヨハネからバプテスマを受けられるという箇所。このイエス様が受けられたバプテスマの箇所を通して、主の御声を聞いていきたい。

I. イエス様が受けられたバプテスマの意味

「そのころ、イエスはガリラヤのナザレからやって来て、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けられた。」(9 節)

「そのころ」とはマルコの 1 章 4 節から書かれている、バプテスマのヨハネが荒野に現れ、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを人々がヨルダン川で受けている時。その時のイエス様の年齢は、30 歳で (ルカ 3:23)、30 年間生まれ育った故郷のガリラヤのナザレを離れ、新たなことをするために旅立っていく時。旧約の時代は、30 歳という年は奉仕を始める年齢であることが多い。ヨセフは、30 歳でエジプトの監督者になり (創 41:46)、祭司は 30 歳で奉仕を始め (民 4:2)、ダビデは 30 歳で王となっている (II サム 5:4)。イエス様も 30 歳でガリラヤのナザレからバプテスマのヨハネのところへと行かれています。偶然に行かれたのではなく、意図を持って行かれています。それは、イエス様は自分の成すべき事の前、つまり、十字架に向かわれる公の生涯の前に、ヨハネからバプテスマを受けるため。

バプテスマ：バプティゾーという動詞から来ており、「浸す」とか、「沈める」という意味。旧約の時代には、祭司達が神殿で奉仕をする際に水で体を洗ったことや、人が汚れた際に身を洗いきよめるという決まりがあった。この儀式は必要に応じて汚れをきよめるためには何度もされていた。しかし、ヨハネのバプテスマは一回限りで、過去の汚れた生活から全く離れ、新しい生活に入ることを求められていた。それは、救い主が来られるので、罪を告白して離れ、神の国へ入るための備えをするというバプテスマであった。

イエス様がその「罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマ」をヨハネから受けた。

本来、罪を持たない神の子であるお方が、過去の汚れた生活から全く離れ、新しい生活に入ることを意味するバプテスマを受ける必要があったのか。罪のないイエス様はバプテスマを受ける必要はないので はないかと思わないでしょうか。イエス様がバプテスマを受けられた意味。

1. イエス様がバプテスマを受けることで、ヨハネによるバプテスマ、彼の行動やメッセージが正しく、神の意志にそったものであると認められた。イエス様は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(マタイ 3:2) と宣べ伝えていたヨハネと同じように、マルコの福音書 1 章 15 節でイエス様は「神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われている。本当に信じて良いのかと思っていた人たちもいたかもしれない。しかし、待ち望んでいた救い主であるイエス様が認めたことによってヨハネのメッセージが本当に正しかったということが分かった。つまり、多くの人たちが悔い改めて、近づいて来ている天の御国に目を向けなければならないのだということに、イエス様が同意されたということ。それが、イエス様がヨハネからバプテスマを受けることを通して表されたということである。※例話

2. 悔い改める必要のないイエス様がバプテスマを受けたことは、イエス様自ら罪人の立場に立ってくださったということ。本来、ヨハネがイエス様からバプテスマを受ける立場であるのに、イエス様がヨハネにバプテスマを受けることを願う場面で、「今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです。」(マタイ 3:15) とイエス様は言われた。「正しいことをすべて実現すること」とは、何を示しているのか？ イエス様がこの世に来られた目的は、罪人の罪の身代わりに十字架で死ぬために、この世に来られた。そのために、イエス様は罪を犯す以外は、罪人の経験することを人間の立場になって歩まれる必要があった(ヘブル 2:17,4:15)。つまり、このバプテスマを受けられた意味は、私たちの罪を贖うために、イエス様自ら罪人の立場に立たれたことを表わしてくださったということである。※例話

II. 御霊に導かれての生涯

「イエスは、水の中から上がるとすぐに、天が裂けて御霊が鳩のようにご自分に降って来るのをご覧になった。」(10 節)

「天が裂け」という表現は、神からの特別啓示がなされるときに使われている(イザヤ 64:1、エゼ 1:1、ヨハネ 1:51、使徒 7:56、10:11)。直接、神様からの語りかけが起こる時の表現。

また、「御霊が鳩のように」イエスに降ったという表現は、ある註解者は、創世記 1 章 2 節の「神の霊は水の上を動いていた」という表現と関連させて、「動いていた」という動詞は鳥が空を舞うことを意味しているので、御霊を鳩の象徴で表現していると述べている。

つまり、鳩が降りてくるように聖霊が見える形でイエス様に注がれたことを意味しており、また、「鳩」は素直さを象徴している鳥(マタイ 10:16) でもあるため、イエス様は神様に従う従順の霊をお受けになられたということ。このバプテスマの時に、イエス様に聖霊が注がれたことは、イエ

ス様の公の生涯が、聖霊によって導かれるのだということの強調。イエス様がこの世に来られた時も聖霊によってマリヤのお腹に宿った時から（マタイ 1:18-20）、イエス様の復活にも聖霊の働きがあったこと（ローマ 1:4,8:11）までを覚えると、イエス様の生涯において聖霊の働きが最初から最後まであったことが分かる。このバプテスマを受けられたイエス様の大切な公の生涯の前にも述べられているということは、聖霊の働きに常に導かれていたということの強調。イエス様は、常に聖霊に導かれてこの世の約 33 年の生涯を全うされたという事である。

私たちはバプテスマを受けた時に聖霊が与えられるのではなく、イエス様を信じて、信仰告白した時に聖霊が与えられる。信仰告白をした時に救われて、聖霊が与えられるのなら、バプテスマを受けなくてもいいのではないか。なぜバプテスマを受けなければならないのか。それは、イエス様が受けられ、また、イエス様が天に上られる前に、弟子たちにバプテスマを受けるように命じられたから受ける。イエス様は、神の前に、人の前に十字架にかかれる決意表明をされた。それは、父に喜ばれるため、そして、私たちを永遠の滅びから救い出すため。だから、救いの恵みを受けた私たちは、イエス様に倣う者として、神の前に喜ばれるため、また、人の前で、自分はイエス様と共に十字架によって死（バプテスマの意味：沈む、浸される）に、新しくされた者（II コリント 5:17）であるということ証し、この世の光として歩むために、バプテスマにおいて信仰の決意表明をするのである。

イエス様が聖霊に導かれて生涯を歩まれたように、私もいつも聖霊により頼み、神に喜ばれ、神を周りの人たちに証し続ける者とされていきたい。

III. 王であり、しもべであるイエス様

「すると天から声がした。『あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。』」（11 節）

「あなたはわたしの愛する子」とは、詩篇の 2 篇 7 節に「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」という箇所引用。この詩篇 2 篇は、救い主が王として就任することと、父なる神と救い主を親子関係として書かれている箇所。

「わたしはあなたを喜ぶ」とは、イザヤ 42 章 1 節に「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。」という箇所引用。イザヤ 42 章は、苦難のしもべについて。主のしもべが苦しみを通って、人々に救いを与えることが書かれている。

つまり、「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」との天の声は、旧約聖書に書かれている救い主が王であり、しもべであることを表している。ヨハネからイエス様がバプテスマを受けた際に、このイエス様が旧約聖書で預言されていた王であり、しもべである救い主なのだということ公に示されたのである。

「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」これは福音。それは新しい命が生まれた時に、その誕生を心待ちにしていた者が、語る言葉と同じ。私たちが生まれた時、両親や周りの人たちが何度も声をかけ、何をしてもその存在が愛おしいように、私たち一人ひとりの存在が愛しいと、神様は何度も私たちに声をかけ続けておられること。イエス様はこの神様の声を私たちに届けるために十字架にかかれた。それは、神にとって私たちは愛してやまない愛おしい存在であるからである。

私たちは、イエス様を信じて救われた後も罪を犯してしまい、自己嫌悪に陥ってしまう。しかし、イエス様は過去犯してしまった罪だけではなく、現在の罪と未来にも犯すであろう罪、私たちのすべての罪を贖ってくださった。なんとこの恵み。

イエス様が私たちのためにこの世に降り、罵倒され、鞭打たれる中で十字架に向かわれたのは、父なる神に喜ばれ、私たちを滅びから永遠の命へと導くため。その決意表明をバプテスマで成され、実際に実行してくださった。私たちもイエス様に倣い、似姿につくり変えられる者として、日々この恵みに応答していく者であり続けたい。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ 3:16)

私たちは日々誰の声、どんな声を聞いているか。命がけで愛してくださった神様の声を聞いて歩ませて頂こう。